

(二) 赤松満祐

嘉吉かきつの乱らん

一四四一年（嘉吉元年）、赤松則村の曾孫ひまごの赤松満祐が、六代

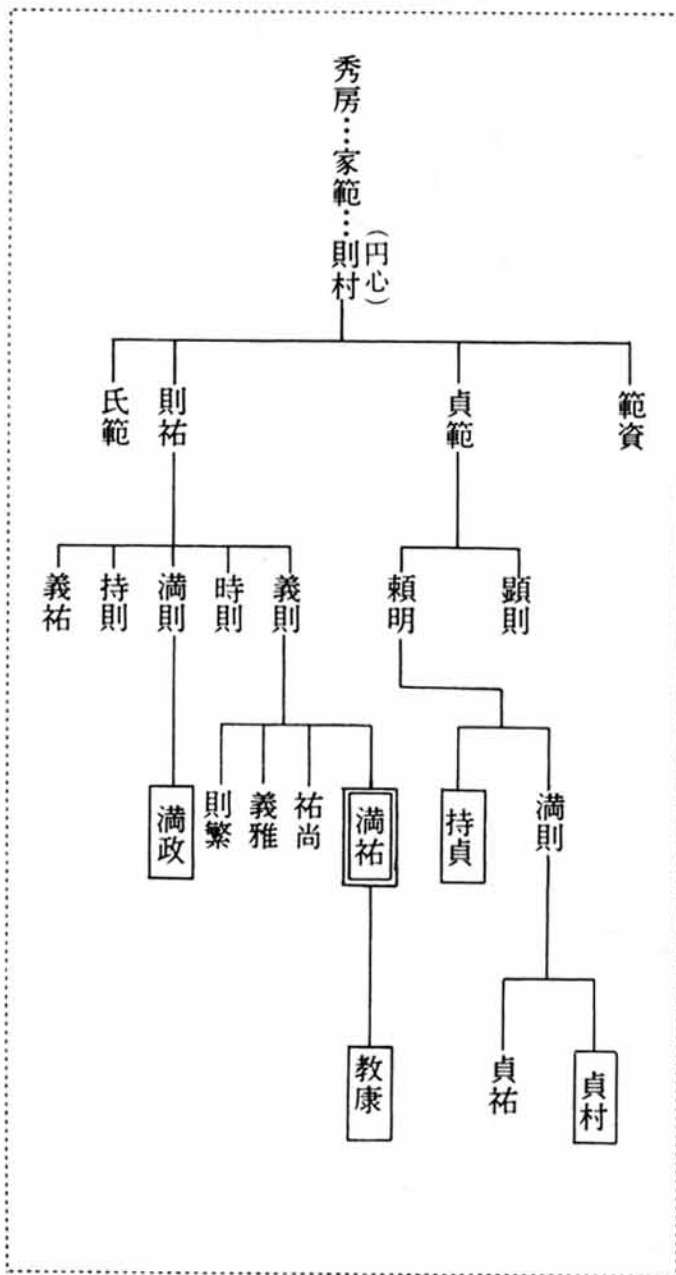
將軍足利義教よしのりを討つという事件が起りました。これを嘉吉の乱といいます。

將軍足利義教は、幕府の権力けんりよくを強めるために、強大な守護大名である斯波しば・

畠山はたけやま・山名・京極・一色などの諸氏の力を弱める政策せいさくを次々と進めました。

赤松氏に対してもその手はのばされてきたのでした。

満祐は、赤松義則よしのりの長男でした。一四二七年（応永おうえい三四年）父の死後、赤松氏ほんきよちの本拠地である播磨の守護に、將軍義持よしもちにお願いがられていた同族の赤松持貞もちさだが任命されそうになったことがありました。しかし、持貞は、將軍のきげん



赤松氏略系図

をそこなうことがあって、ようやく満祐は、播磨・備前・美作の守護を持ち続けることができました。

その一か月後に將軍義持がなくなり、弟の義教が將軍となりました。最初からにがい経験をしていた満祐と新しい將軍義教との間は、初めのうちは平和でした。ところが、一四四〇年（永享^{えいぎょう}一二年）三月に將軍は満祐の弟、義雅^{よしまさ}の領地を取り上げ、その領地を同族の赤松貞村と細川氏^{ほそかわ}に分け与^{あた}えてしまいました。細川氏に与えられた領地は、満祐の父が、戦いの手柄によって將軍義満から与えられた貴重なものでした。

満祐は、この仕打ちにたえられず、將軍に領地の返還^{へんかん}をたのみましたが、聞き入れられませんでした。こうして、將軍と満祐は、はげしく対立するようになり、この事件は世間の人も知るようになり、満祐の身の上にたいへんなことが起こるだろうとうわさされるようになりました。そこで満祐は、^{きよう}狂

氣をよそおつて隠居し、身の安全をはからねばなりませんでした。

満祐は、將軍に討たれるのを待っているよりも、將軍を討つことを考えたのでした。一四四一年（嘉吉元年）六月二十四日、將軍は京都の赤松屋敷に招かれました。それは、そのころ関東地方で起こった合戦に勝ったお祝いの会の一つで、赤松氏が開いたものです。將軍は、赤松貞村をふくめた十人余りの家来を連れてやって来ました。

満祐は狂気ということで他の家にいましたので、満祐の子教康が接待にあたりました。会が終わりに近づいたころ、一頭の馬があばれだしたかと思うとすべての門が閉ざされ、満祐の家来がいつせいに刀を抜いて、將軍の一行に切りかかりました。とっさの出来事でしたので、あつという間もなく、將軍はあえなくその場で討たれてしまいました。立ち向かった家来たちも、たちまち切り殺され、あるいは重傷を負いましたが、赤村貞村らは、やっこのことで逃げ帰

りました。

赤松方は、將軍の首を奪うと、遣がいを残したまま屋敷に火をつけ、満祐たちは京都を脱出して、播磨に向かいました。簡単に將軍を討たれてしまった幕府には、すぐに満祐たちを追討する者もなく、將軍の遣がいも、翌日、ようやく焼跡から掘り出されるといふ有様でした。

坂本城

坂本城は、書写山の南すその西坂本というところにありました。

赤松氏は、上郡町赤松の白旗城を中心として各地に一族を配置していました。この坂本城は、則村の子、則祐が戦に備えて築いた城です。それは、百八十メートル四方もある居館式の平城で、周囲に土塁と堀をめぐらした大規模なものでした。

白旗城は播磨全体から見ると西にかたよっています。そこで、赤松氏が領地を支配するための拠点としたのが、播磨の中心に位置するこの坂本城でした。

播磨十六郡のうち、東の八郡は別所氏べっしょが守護代になり、西の八郡は宇野氏うのが守護代となつて、両守護代とも坂本城で仕事をしたといわれています。



坂本城跡（やぶから手前のところ）

嘉吉の乱を起こした満祐は、この坂本城を本拠として、追討軍と戦うために一族をここに集合させました。しかし、赤松貞村と赤松満政は、参加しないで、幕府の味方となり、追討軍に加わったので、一族は分裂ぶんれつしてしまいました。そのうえ、領地の美作・備前の武士たちも満祐に反抗しました。

将軍が討たれた当初、幕府の追討軍の足なみは、なかなかそろいませんで



城 山 城 跡 (山の最高所が城の中心部)

した。しかし、以前、美作の守護を赤松氏に奪われた山名氏は、満祐を討ち取った者は播磨の守護に任命されるということを知って、たいへんはりきりました。そして、八月下旬げじゅんごろから赤松氏への攻撃が本格的になってきました。

坂本城を本拠とした満祐は、東は須磨・明石、北は戸倉峠とくらどうげ・生野峠いくの方面にまで兵を出して守りましたが、生野から攻めこんで来た山名氏の軍にたちまちに敗られ、坂本城は落とされてしま

いました。そこで、龍野の北の城山きのやま城にたてこもり防戦しましたが、防ぎきれず、九月十日、ついに満祐は、家来とともに自害しました。

播磨・備前・美作の守護として勢力を持っていた赤松氏は、これでついにその勢力を失ってしまいました。